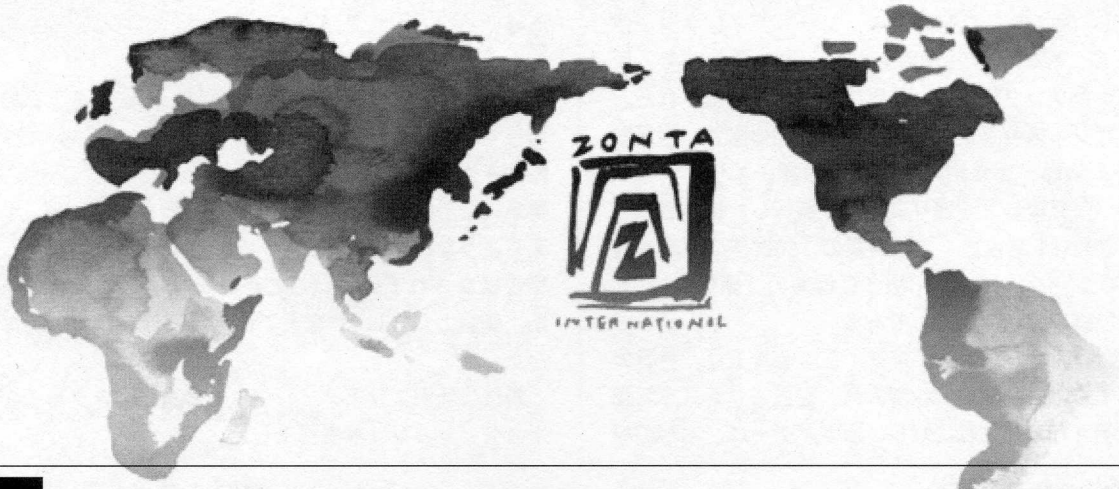
ZONTA INTERNATIONAL

OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪IIゾンタクラブ第13号（2000年7月）



巻頭言

会長 川村　くに

会長をお引き受けして、はや一年が過ぎました。私の机の上はいつの間にかゾンタの書類で一杯になってしまいました。次々と送られて来る書類の処理と毎月の例会の準備に追われつつ、何とかここまでこられましたのも会員の皆様のご支援によるものと深く感謝しております。

この一年間の活動としましては、

(1) アトランティツクシティエリアZ.C.及び、ジョンソン・カウンティエリア（カンザス）Z.C.との姉妹クラブ締結

(2) チャリティコンサート「ホルンによるクラシックとボサノバの夕べ」

(3) 女性の健康シリーズ心療内科中井吉英教授「女性の四季」

(4) ドネーション・ライトハウス、アイバンク、ヒアリングインターナショナル、女性基金と毎年続けている大阪城公園へ白木蓮を植樹致しました。

地区大会での小和田恒様の基調講演でもエリアミーテイングでの李嬿淑様の講演でも環境問題が採り上げられました。このままでは、人類は破滅の危機に曝される日が遠からず来ると思います。女性の方で地球レベルで環境汚染について考え行動することを後期年度の活動目標にしたいと思います。

更に「ゾンタ」について、「ゾンタってなんだんねん、ゾンタクでっか？」と言われない様にもっとPRして行くことも目標にしたいと思います。

前期にあげましたクラブの組織強化につきましては2名の退会者はありましたが、又力強い2名の新入会者を迎えることが出来まして、更に組織強化をはかれると喜んでおります。今期はエリアミーティングのホストクラブを受け持つことになりました。エリア4の皆様にご満足いただける様頑張りたいと思います。どうか会員の皆様、本年度も宜しくご支援をお願いいたします。

全体会議・ビジネスセッションについて

幡山　玲子

5月の19・20日、新緑が眼にまぶしい京都蹴上の都ホテルに於いて、京都雅ゾンタクラブをホストクラブに26地区エリア4第2回エリアミーティングがおこなわれた。参加者はエリア1の沖縄・東京・仙台・札幌Ｉ各ゾンタクラブからの参加者を含め、総勢314名である。

先ずこの1年間の物故者への黙祷の後、エリアディレクター伊藤美智子様の挨拶、続いて原26地区ガバナーの挨拶と続き、原様より京都雅ゾンタクラブに対し、地区アワードが贈呈された。

引き続いて、ビジネスセッションにうつる。開会宣言、定足数確認、プログラム承認、北九州A.M.議事録承認、エリアディレクター活動報告、決算報告と型通りに議事が進行し、提案議題の審議にうつる。議題は1.名古屋ＩＺＣ提案の「2006年の国際大会（於京都）開催について」と、2.大阪IZＣ提案の「第5回地区大会の資料報告及び議事録について」である。

1.国際大会の開催地については、京都ＩＺＣ会長より、世界大会を京都で開催するには、宿泊の収容人員、交通アクセス等問題があることが説明された。これに対し、原ガバナーは、本部理事会はアジア地域で開きたい意向はあるもののまだ最終決定には至っていないこと、京都に開催引き受けを働きかけたのではなく、もし決定されれば京都で引き受けて下さるかどうか尋ねただけである旨の返答があった。この件については大阪で開き、京都や奈良を観光する等いろいろな意見がでたが、最終的に京都開催を白紙に戻してもらうとの結論に達した。

2.横浜地区大会の報告については、開催後半年を経たにもかかわらず未だ議事録も発刊されていないことについて原ガバナーに説明を求めた。地区会計の高橋様から、バイローズにのっとり、早急に会計報告をされるよう何回も働きかけたが、その働きを抑えるような反応はあったものの、未だ地区会計に対し正式な会計報告はなされていないことが時間を追って詳細に経過報告された。結論としては5月末までに会計報告をしていただくことになった。

最後に新旧エリアディレクターの引き継ぎがおこなわれ、ビジネスセッションは無事終了した。

ワークショップ　1

京都雅ゾンタクラブ　池田史子先生『新しい後見制度』を聴いて

福本　敏子

永年、裁判所書記官としてご活躍された豊富なご経験を交えて私たちにとても分かりやすくお話してくださいました。以下にご講演の骨子を紹介させていただきます。

今年4月1日から介護保険の発足と同時に後見制度が発足した。後見制度とは判断能力の不十分な人を保護する制度である。今までも禁治産宣告や準禁治産宣告という制度があったが、これらは戸籍に記載される為、戸籍を汚すことを嫌う日本の風土から利用する人は少なかった。未成年者を保護の対象とする後見を『未成年後見』と呼び、これ以外の者を対象とするのが『成年後見制度』である。新しい制度は、高齢社会への対応および知的障害者・精神障害者の福祉の観点から本人保護の理念に基づき作られている。

歴史的に観てみると1960年代より精神薄弱者の権利化が叫ばれフランス・ドイツ・オーストリアと制度化されていった。

成年後見制度は大きく2つに分けられる。法定後見制度と任意後見制度である。更に法定後見制度は補助・保佐・後見の3つに分けられる。補助が全く新しい制度で軽度の精神上の障害により判断能力が不十分な人を対象とし、保佐は従来の準禁治産に、後見は禁治産にほぼ対応する。また今回新しくなった事項として配偶者の法定後見の廃止・申立権者に市町村長が加わったこと・保佐人に取消権が与えられたこと・法人が後見人等になることや複数の後見人が認められるようになったこと・成年後見人が本人の居住用不動産について、売却等の処分をするには家庭裁判所の許可が必要になったこと・戸籍記載に代わり東京法務局で一括して登録するようになったことが挙げられる。

ご講演を拝聴して特に興味深かったのは任意後見制度でした。この高齢化社会ではいつ自分が後見していただく側にまわるのか分からないので、ある程度の年齢になれば安心できる方と任意後見契約を結び、老後の財産管理を任せるべきだと思いました。それが明るい老後の第一歩と思いました。

ワークショップ　2

「ゾンタを理解する」大賀恵美子氏

田中　茂美

「あなたは、ゾンタについてどのように説明する事ができますか？」という問いかけから大賀氏の御講演が始まった。
ゾンタクラブが日本で初めて東京に設立されてから40年に及んで活動に深く拘って来られた大賀氏のお話は示唆に富んでおり時には私達に反省をも促される意義深いものだった。内容を具体的にまとめてみた。

・今回のようなエリアミーティングは、本来　会員のトレーニングの為に行われるものであり、会員はトレーニングにより奉仕活動や事業をよく理解する必要がある。

・ゾンタの将来の発展の為には今後は若い会員を募る事が重要課題である。その為にはゾンタについての説明が出来なければいけない。「楽しい」「旅行に行ける」では不十分。

・いうまでもなく「ゾンタ」は管理職、専門職の地位にいる人が力を合わせて女性の地位向上の為に活動する奉仕団体である。

・ゾンタは「国際ゾンタ財団」と「国際ゾンタ」に組織が分かれており私達は国際ゾンタの中のゾンタクラブの会員であり、クラブ単位で入会している。ゾンタクラブが集まりエリアを作っており、エリアの世話役をエリアディレクターと称しエリアの集まりが更に地区となり世界30地区にガバナーという世話役が居る、この地区がまとまって「国際ゾンタ」が存在する。

・各クラブの運営についてクラブマニュアルが作られており是非参考にして頂きたい。この中に組織に混乱が生じたら原点に戻ると良いとある。

・国際ゾンタ財団は集まった奉仕資金や寄付金等の運営を行い、その奉仕事業は女性の地位向上の為に用いられる。例としてアメリアイアハートは宇宙工学を学ぶ女性に与えられる奨学金、国際奉仕基金は国連、ユニフェムと協力し、女性割礼防止に協力したり、ネパールのMMT、インドの女性・子供に対する暴力防止運動支援、毎年アワードをして女子大生に奨学金が与えられる（本年は11ヶ国から19名授与され26地区からは0だった）、暴力を受けている女性子供を受け入れる施設や加害者も教育する施設の支援、将来ゾンタを担う若いZクラブ支援を行ったりしている。

・他にも色々な基金の説明もあった。（クラブ運営に拘わる）

最後に「私はゾンタは何をしているか？のお話をしました。渡米していた頃を合算するとゾンタに拘わり50年になります。若い頃、日本がまだ発展途上国とされていた頃私は渡米し勉学にひたすら励んでいました。その頃図書館でアルバイトしていた私に毎日簡素な昼食を4年間絶える事なく支援して下さった女性がいました。その方は私に将来きっとゾンシャンとして活動できるような人になるように願っていると言いながら、地味なほんの少しの援助を好意と希望を持って永々と続けて下さいました。その時私は若い将来に希望を託して、ひたすら支える奉仕の心を教えられました。その心がゾンタの原点だと思います」と結ばれたのが深く印象に残った。

ワークショップ　3

女性の地位向上に向けて21世紀を生きる

楠本　由紀子

講師の韓国副ガバナーであるＹｕｎ－Ｓｏｏｋ Ｌｅｅ女史は30年前ゾンシャンになり放送の仕事から女性団体協議会が元となりいつの間にか国会議員になっていました、と自己紹介され、まず21世紀をどう生きるかを問う前に、女性として今の世界をとらえるキーワードＭＩＣＣの説明から

Ｍ＝Ｍｏｂｉｌｅ動的（モバイル　ソサエテイ）従来の農業社会・産業社会とはまるで逆。情報・知識社会になる

Ｉ＝Ｉｎｔｅｒｎｅｔインターネットの時代　これに入らないと経済的にも時間的にもかなり無駄。講師の知人の老教授が論文を書く　アメリカの3つの大学（ハーバード、エール、スタンフォード）の図書館で文献をじっくり読む　夢で1000万ウオンをかけて渡米され、3ヶ月かけて3大学を巡り論文を提出された。しかし自分より若い助教授は米国に行かずに自分より上の論文を提出した。老教授が恥をしのび助教授に尋ねたところ2ヶ月かけ苦労してインターネットで各大学の資料を引き出したとのエピソートを紹介（具体的でかなり説得力がありました）

Ｃ＝Ｃｏｍｐｕｔｅｒ　コンピューター　インターネットをするにはコンピューターが必要

Ｃ＝Ｃｅｌｌｕｌａｒ　ｐｈｏｎｅ　小型携帯移動電話器自分と一緒に交信機器を持つ、生き方に変化が生まれる、批判するのではなく、ありのままに受け入れることが大事である。今までの産業社会で一番大事であったのは力であったが、これからの情報社会には創造力、冴えた頭が必要。その情報化社会に必要なキーワード3つのＦ

Ｆｅｅｌｉｎｇ　感性　男性は今まで感情を押さえる教育を受けてきたがこれまでと違った男性が要求される→感性がするどい程、心地が良い時代

Ｆｉｃｔｉｏｎ　想像力

イマジネーション・クリエイティビティ。見えないものがみえる。考えられないものが考えられることが大事になる。

Ｆｅｍａｌｅ　女性　これからの社会は女性が持っている女性性がなければ生きていけない、男性が今まで一生懸命働いて幸福を求めてきたが、結果環境が死にかけている。やりたいことをやり、捨てたいものを捨て資源を使い果たした結果→環境問題となり　1.気候の変化　温暖化　2.オゾン層の破壊　3.環境ホルモン、ダイオキシン問題へと発展　これらを押さえていくには21世紀は女性性が必要となる。

女性性とは子供を産む能力、10ケ月待つ能力、辛抱強さ、もう一つの生命に命をかける犠牲精神があり、子供を育てることから他の人を愛する能力、奉仕する能力がある。男性にも女性性を与えていき、社会制度を変えて環境の良い、住みよい地球にする為にも、どうぞゾンシャンの皆様方も頑張って、たくさんの活動できる人達が増えてくることを心から願っておりますと、締めくくられました。早速パソコンに今夏はトライしようと決心して京都都ホテルをあとにしました。

4月12日

京都Ⅱゾンタクラブチャリティー園遊会

牛田　三千子

春らんまんの4月12日、京都Ⅱゾンタクラブ主催の園遊会におじゃました。場所は智積院。早めに四条河原町に着いたので、鴨川に沿って南にゆっくり歩く。

今年は少し遅い桜がちょうど盛りで、傍らの雪柳の白さとよくマッチして夢のように美しい。30分ほどの散歩で東山七条の智積院に着く。大阪Ⅱクラブからの参加者は、吉川、久武、幡山、牛田の4人で、現地集合し花盛りのお庭をとおり早速院内へ。まずお茶席にて抹茶とお菓子をごちそうになったあと、販売コーナーを一巡させて頂く。京都らしい和菓子、お茶、陶器、またバラの花などお部屋いっぱいの出店で、どれもほしくなりそう。キョロキョロしているところへ、お弁当をどうぞ、とのお誘いがあり隣室へ移動してきれいでかわいいお弁当を頂く。一服し、おなかも満足したところで、いよいよ庭園と障壁画を拝見に。数多い名勝庭園の中でも傑作といわれる智積院のお庭は、中国の廬山を形どって作られたとのことで雄大で美しく、また国宝の障壁画も素晴しかった。智積院は真言宗智山派の総本山とかで、京都に建立されてからの400年ほどの間に多くの学僧がここで学ばれたという。建物、庭園共よく手入れされすがすがしい。智積院についてはあまり予備知識もなく訪れたが、最高の季節にこういう機会を与えられたことに感謝したい。また、毎年こんな素晴しい園遊会を催される京都Ⅱゾンタクラブの皆様の熱意とご努力にも敬意を表したい。

見学のあと、大阪Ⅱの4人は近くの喫茶店に陣どり、さらなる高尚な（？）論議に花を咲かせて数時間、心ゆくまで京都の春と花を堪能させていただいた。わさわさと過ぎゆく毎日の中でオアシスのような一日であった。京都Ⅱゾンタクラブの皆様の心からのおもてなし本当に有り難うございました。

4月29日

古の奈良八重桜の優雅な微風に誘われて

川嶋　妙香

去る平成12年4月29日、野に山に花綻びて、鳥うたう長閑な一日を奈良ゾンタクラブの粋な計らいで、奈良国立博物館で認証10周年記念式典と祝賀の宴に参加することができました。幸い天候にも恵まれ、受付を通って博物館南庭に所在する茶室「八窓庵」の淡く優しい八重桜の花びらが舞う赤毛氈に座らせて頂き、季節の和菓子と野点の一服の心温まる和やかな持て成しを受け、麗らかな春を心行くまで満喫いたしました。伺う所に因りますと奈良八重桜は百人一首で有名な「いにしえの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな」〔伊勢大輔作〕の聖武天皇の御代から語り継がれ、平城京で大宮人が愛でた花であったそうですが、移植、環境への適応力は非常に弱く、長い間史的伝承の中に埋もれていて、一度絶えかけた大変珍しい山桜を先祖とする貴重な品種とのこと、現在は奈良県の県木として大切に育てると共に、奈良ゾンタクラブとしても保護、育成、普及を目的とした植樹や広報等の奉仕活動を持続的にしておられるそうです。去る2月には平城京跡、朱雀門横にも一本植樹して傍らに記念碑を設置され、奈良市の全中学校・高等学校にも植樹するとともに、全生徒12000と教職員、また県民ホール、婦人会館、公民館等へも趣意書〔リーフレット〕を作成して配布され、私共のお土産の袋にも可愛らしい奈良八重桜の絵葉書、便箋と封筒が入っておりました。由緒ある清楚な気品豊かな樹木を通しての奉仕活動は人々の心を優しく和ませ、歴史の重みは時間と空間を越えて更に結束の契りを広げてくれるように思え、久しぶりに奈良に、またこの長閑な桜匂う日に伺うことができて幸せな気分に浸らせて頂きました。

心の籠った優雅な御点前と春の陽気に心弾ませながら丁度博物館で特別に開催されていた「明王ー怒りと慈しみの仏ー」という各時代を代表する明王像を一同に会する華やかで躍動感溢れる展示会を拝見させて頂き、此れも機会が無ければ滅多に遭遇できることではないと至極感激いたしました。仏様は大きく4種類〔如来、菩薩、明王、天〕に分類できると謂れ、その中でも不動明王が私共に最も一般的ですが、明王は如来の命を受け忿怒の相を表わし、慈悲相では容易に教化することができない衆生を導く役目を持っているといわれるだけあって創造力豊かな激しい能動的な明王像の数々でした。現代の未法世相に臨む時、実際にこのように真剣に形振り構わず叱咤激励して下さる明王の存在は霊験灼で私共の日常生活にも不可欠な存在ではないかと感動しつつ、この良縁に巡り会えたことに感謝いたしました。記念式典のプログラムは物故者への黙祷や記念事業等の報告に始まり、会場が国立博物館に相応しい意義ある「博物館の過去と将来」と題する記念講演を元文化庁長官で前奈良国立博物館々長の内田弘保先生より拝聴致しました。現在所謂国立博物館は日本に3箇所〔東京、京都と奈良〕にあり、奈良のは二番目で、建設当初の苦労話を聞かせて頂きました。そして博物館は極普通の人々が肩を張らずに気軽に足を運んで貰える楽しい場所にしたいと博物館に寄せる期待と夢を分かりやすく語りかけて頂きました。また、続いて奈良博物館資料管理研究室長の西山厚先生からは「聖武天皇ーー大仏建立に込めた願い」と題して天平勝平4年〔752年〕に盧舎那仏〔大仏〕開眼を諸願成就された聖武天皇の一代記と仏教との出会い、大仏造立の詔に託す真摯な志を貴重な資料に基づき解説して頂きました。聖武天皇は約1300年前に誕生され、飢餓、大地震、天然痘等疫病の流行、他、政権不安定の中、数々の苦境を乗り越え仏教の真の教えに導かれたこと、国分寺、国分尼寺と大仏造立の詔、それに秘められた願いは決して権威の象徴ではなく、人々の心の幸いと平和、そして国家鎮護を願って、「… 知識に預かる人は懇（ねんころ）に至れる誠を発し、各介（おほき）なる福を招きて、日毎に三度盧舎那仏（るしゃなぶつ）

を拝むべし。自ら念を存じて各々盧舎那仏を造るべし。如し更に人有りて一枝の草一把の土を持ちて像を助け造らむと情に願わば、恣に聴せ。国郡等の司、この事に因りて百姓を侵し擾し、強いて収め斂めしむること莫れ。遐邇に布れ告げて朕が意を知らしめよ・・・」仏は人々の心に建立されるものであって、そこに初めて大仏造立の意義があると明言しておられることを。ミレニアム以上も前に混迷の世情に救いの指針を示された聖武天皇の叡知と、此の混沌とした時代の民衆を大きく導かれた行基法師の深遠な洞察力と感化力に、時を越えて私の人生にとっても胸躍らせられる貴重な心温まる一日でした。此のすばらしい企画をされました奈良ゾンタクラブの皆様の熱意と努力に敬意を表し、更に奈良八重桜の植樹と開花と共に会が大きく発展し、奉仕活動が実りあるものとなりますように心から期待し、願っております。

最後になりましたが、去る5月21日あの阪神・淡路大震災で崩壊しました矢張り行基法師縁りの萩の寺〔東光院〕復興の落成式が曹洞宗大本山永平寺貫首を拝請し厳修されました。此の名刹の村山住職夫人は大阪Ⅱゾンタクラブの会員でもあり、立派な本堂落成には、彼女の献身的な精進と並々ならぬ尽力が忍ばれ、心から御慶び申し上げたいと思います。

合掌

5月27日

高松ゾンタクラブ　設立10周年記念式典、祝賀会に出席して

萩原　謡子

若葉の香る5月27日、高松国際ホテルにて香川県知事、高松市長、伊藤美智子エリアディレクターや80余名のゾンシャン出席のもと、めでたく執り行われました。設立当時、平均年齢42才という若いクラブだけあり、10周年を迎えられた現在も活気に満ちたクラブという印象を受けました。高松ゾンタクラブは10周年記念事業の一環として2つのことを行いました。

1つ目は、4月に施行された介護保険のサービスの質向上、苦情調査の機動力など、円滑な実施のために、財団法人香川県国民健康保険団体連合会に、介護保険広報車2台を寄贈しました。ホテル正面玄関に車椅子をリフトアップさせたり、座席の向きを変えられる設備を整えた車2台展示されており、知事、市長に目録、キーが贈呈され、県、市からは感謝状が贈呈されました。

2つ目は海外へのボランティア活動としての開発途上国への援助です。ネパールでは、教育どころか、基本生活すら保障されず、一生美しい物、楽しいことを何も知らずに生きていく孤児や人々がいます。数々のボランティア公演を行っている劇団曼珠沙華より、そういう人達に異国の文化に触れ、楽しいひと時を味わってもらいたいという思いで、公演を開催したいとの要請があり、高松ゾンタクラブが賛助、支援しました。祝賀会のステージでは、ネパールでの公演のハイライト部分が8名の劇団員によって熱演されました。曼珠沙華とは天界に咲く白い花のことで、これを見る者は自ら悪行を離れるという言い伝えの幻の花です。舞台から美しく楽しく、悲しみも苦しみも忘れ去ってしまえる極楽浄土の世界を届けるということで、宝塚風、大衆演劇風、ミュージカル風、歌謡曲あり、演歌ありの無国籍なネオジャパネスクファンタジーとなっております。ビデオで公演当時の様子が放映され、一生、陽の当たらない所にいる人々に、どれ程喜んでもらえたかということが、伝わってきました。

高松ゾンタクラブが、地域、地球レベルでの奉仕活動を通じ、会員相互の親睦、信頼がさらに高まり、ますますご発展されることを祈念して、今回の報告とさせて頂きます。

エリア1のエリアミーティング沖縄〔那覇〕に参加して

宮本　典子

エリア分割以来、他のエリアではどのようなミーティングをもっておられるか興味もありました。来年は私たちがホストとしてエリアミーティングのお世話をしなくてはなりませんのでその勉強もしなくてはなりません。沖縄ゾンタクラブの元会長大林静枝さんは、私たちのチャーターナイトで同じテーブル、それ以来の友達です。またたくさんのゾンシャンにお会いできる！こうして私は沖縄へ行ってきました。川村会長、西さん、久岡さんとご一緒に。

5月12日5時まで授業をして関空からでかけました。川村会長とご一緒でした。その日は沖縄料理と泡盛のパーティがあり、楽しみにしていたのですがこれには間に合いませんでした。ブタの足とか皮つきのお料理、美容にいいとかとても残念でした。着くのが遅かったのでお友達に会うのは明日にし、4人で最上階のバーで美しいカクテルで盛り上がりました。

13日、針生エリア1エリアディレクターのもとエリアミーティングが始まりました。原ガバナー、李副ガバナー、伊藤エリアー4ディレクター、またお客さんとしてエミーライ前ガバナーもいらしていました。ビジネスセッションの議事は初めに、針生議長からロバート法は時間がかかるのでやめますが、一般の会議法でやりますとおことわりがあり、身近な会議のやり方で行われました。例えば世界大会や地区大会に出席できず、プロキシーをお願いするクラブは10万円支払うという旧エリア1の取り決めを撤廃するという提案は賛否両論また10万円は高いかどうかなど活発な意見がでましたが、最初の提案、撤廃するかどうかで採決があり、賛成多数、（18対2？）で撤廃、後のことは今後考えることとなりました（一時一件の採決）。とても見事なものでした。一度に必ずひとつが原則であります。値段を下げるという修正提案はありませんでした。あればいくらにするかで、もめたかもしれません。12時までには終わらなかったことでしょう。

午後の講演、夜のパーティ、ともにとても楽しいものでした。お友達にも、たくさん会えて、翌日はみんなで東南植物園の観光もして、楽しく充実した週末でした。

2001年は、大阪でお会いしましょう

実行委員長　西　麗子

2001年エリアミーティングのご案内

21世紀の幕開けの年に当たる2001年のエリアミーティングは私達大阪Ⅱゾンタクラブがお世話させて戴きます。開催日時については、既に三宅エリアディレクター、今泉副ガバナー、李ガバナー、小樽ゾンタクラブ（2001年エリア１ホストクラブ）にご相談、協議し、2001年5月11日、12日と決まりました。開催場所は私達の例会場所であり、認証状伝達式を行った、大阪中ノ島のリーガロイヤルホテルです。現在私達は、エリアミーティングに向け、役割分担を決め、会員全員が一丸となり、準備に取り組んでいます。そのコンセプトは、『手作りの心のこもったおもてなし』『実りのある、有意義な会議とワークショップ』『楽しい懇親会』です。懇親会では、川村さと子会員の美しいソプラノを存分に楽しんでいただく予定です。

2001年のエリアミーティングでは、新しい世紀にふさわしく会議が運営され、なおかつゾンシャンの友情を深める懇親の場所となるよう、最大限の努力をする所存です。まだまだ未熟な私達です。ガバナー、副ガバナー、エリアディレクターはもとより、エリアミーティング経験の京都雅、北九州ZCをはじめとして、皆様のご支援、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。2001年の5月には、多数のゾンシャンのご来阪を心よりお待ちしています。

第3回エリアミーティング（ディストリクト26、エリア4）

2000年5月11日（金）　於リーガロイヤルホテル
　会長会議：楓の間（5時～6時半）
　懇親会：ダイアモンドルーム（6時半～9時半）

2000年5月12日（土）
　ビジネスセッション・ワークショップ：楓の間
　懇親会：ロイヤルホール（控室　月の間）

2000年5月13日（日）エクスカーション
　雨天でも楽しく、皆様に喜んでいただける大阪らしい企画にしようと、現在検討中です。

わ もだち リレー・エッセイ

命に輝きを　— 乳がんと向きあって —　……西村　博子

1999年3月ハードな勤務状況の日々が続いていたある日、夜中にふと目がさめた。右胸がジーンと痛い。何気なく触れてみて胸の中に何か出来ている。何だろうと思いつつまた深い眠りに落ち入った。翌朝目をさますとまだ痛む。歯が痛い時のような鈍い痛みだった。そういえば40才頃の健康診断で良性の乳腺症と診断を受けたことがある。同じ右乳房である。翌々日も痛みが続いた。大丈夫よと思いつつも、とにかく病院に行こうと決心したのは最初の痛みをおぼえてから1週間も経っていた。乳腺専門外来があるとも知らずに訪れた病院で、診察をすぐに受けマンモグラフィー、エコー、細胞診などと順序よくすすめてもらった。細胞診は本当に痛かった。痛い時には歯をくいしばるのではなく、息をフーフーとはくと良いのよと、後で友人に教えてもらった。「もしかして・・・でも・・・まさか・・・」等々、不安がふと頭をよぎる中で多忙な日々が続いていた。その後、検査結果を聞き、初めて「悪性のものです」と告知を受けた。いわゆるインフォームドコンセントである。家族・親戚・友人たちの中に乳がんにかかった人はいない。乳がんがどのような病気なのか、どのような状況になるのか、それまでよくわかっていなかった。

30代の頃、ニューヨークでなくなられたジャーナリストの千葉敦子さんの著書「乳がんなんかに負けられない」を読んだことがある。またAmerican Cancer Societyがハワイ在住の日本婦人のために印刷された“乳がんの予防ー簡単に一人で出来るお乳の検査ー”という小さなパンフレットも姉からもらっていた。実際5年前位にはバースデー検診と称し、1年に1回自己検診もしていた。それゆえに、私の頭の片隅には乳がんは自分で発見できるという認識もあった。今思いかえしてみても、告知をうけた時の私は表面的によく冷静でいられたなと思う。マンモグラフィーの石灰化した部分が鮮明なレントゲン写真、視触診などの結果の説明をうけながら、その病状について初めて詳しく知った。冷静を装いながら、心の中で「エー？ホントー？」と小さく叫びながら頭と目で説明される言葉の意味を必至で追いかけていた。この状況の中で内容を理解するのはずいぶん難しかった。あとから説明された資料を何度も読み返していた。その後各種の検査を受けた上で、その手術法については最終的に自分で選択することが求められた。不安だった。セカンドオピニオンというべき声を私は家族やまわりの方たちに求めていた。告知を受けた私のことを聞いて、家族や職場の先輩、同僚たちはびっくり仰天である。本人以上に周囲の人たちが動揺した。友人たちは「ひょっとしてサヨナラ！！」だと真剣に思ったそうである。実際手術法の選択には大きな勇気と決断が必要だった。自分の体の状況をよく理解し自分自身のライフスタイルの中でどのような治療を望むのか、この時ほど考え深く悩んだことはなかった。最終的に私は乳房温存療法でお願いすることに決めていた。

4月に入り入院、翌日には5時間程のＯＰＥを受けていた。「西村さーん！済みましたよ」と先生に呼ばれ麻酔から眼をさました時はベッドの上だった。右胸のあたりがいやに重かった。眠っている間に全てが済んだという感だった。手術後の体は順調に回復、食事もすすみリハビリの手の体操も毎日毎日続けた。放射線療法も開始され、右腕を上げるのに汗をかきながら毎日5週間照射を受けた。退院後の家事は右手の力が入らず思うようにすすまない中で、放射線や投薬の副作用をほとんど自覚せず、大過なく過ごせたことは何よりうれしかった。その後シェイプアップとリハビリのために始めた水泳も水中ウオーキングや泳ぎが私の心と体をずい分癒してくれた。1年が経過し体調も良く、なかなか切れなかったナンキンも今は自由自在と力が入る。

資料によると、日本において女性の30人に一人は乳がんである。死亡率は10万人あたり6.4人で、女性がかかるがんの中でもトップである。それでも欧米に比べると1／5ー1／4程度にすぎないけれど、ライフスタイルの欧米化とともに今後も増え続けると考えられている。乳がん発症の危険因子は

1）出産歴・授乳歴がない
2）閉経年令が遅い
3）閉経後の肥満・高身長

があげられている。そして一次予防の面から食物・栄養との関連ではアルコール、総脂肪はリスクを上昇させ、野菜、果物、適度の運動はリスクを低下させるという。また二次予防での検診はその重要性から日本では従来の視触診のみでなく、諸外国のようにマンモグラフィーをあわせた検診の導入が期待されている。こうしたことを私はお世話になった病院の講演会でも学んだ。私の乳がんもマンモグラフィーに鮮明に表われていたので、その効果はすごいと思う。

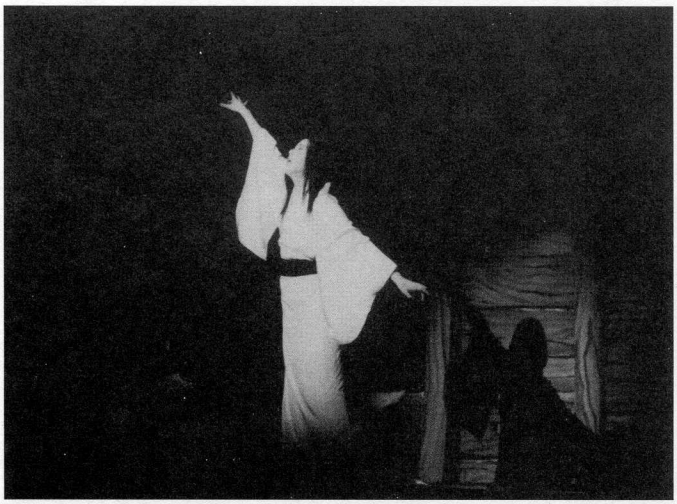
現代は健康ブームといわれる程、本やテレビなどでも健康情報があふれている。私の若い後輩はインターネットで乳がん情報をいち早くとり寄せてくれた。病気を告知され不安だった日々の中にもさまざまな角度から健康について学ぶ機会を与えられた。各々のライフスタイルの中で早期発見、早期治療につながっていくことが出来れば最高である。21世紀にはその予防法は個人の特徴に合わせたものに変わっていくと言われている。乳がんも自己検診があります。ぜひお薦めします。

最後にゾンタの皆さまをはじめ、多くの友人たち、専門の先生、家族の温かい励ましに支えられ治療に専念し　ここまで回復できました。心より厚くお礼申し上げます。乳がんと向き合うことができたことをきっかけに、これからも“女性と健康”のテーマについて取りくんでいくことを願っています。

新入会員　自己紹介

河村　さと子

本年一月より大阪Ⅱゾンタクラブ会員に加えていただきました河村さと子でございます。私の正式な身分は兵庫大学短期大学部助教授となっておりまして、25年以上も幼児教育の分野での教員養成と音楽教育指導法を教授しております。と同時にソプラノ歌手として、今まで30年余り、リサイタルをはじめとして各種コンサート活動や関西二期会会員としてオペラに出演等を行ってまいりました。



オペラの分野での私の代表主演演目は、皆様よくご存知でいらっしゃる團伊玖磨作曲・木下順二脚本による「夕鶴」でございまして、主役の「つう」を持ち役にしております。このオペラは1948年〔私の生まれた年〕に大阪朝日座で初演されているのにもかかわらず、その後35年間もいろいろな事情で、関西では上演されておりませんでした。20年程前に私は、このオペラと、その経緯に非常に興味を抱き、大胆不敵にも、直接、團先生と木下先生に掛け合い、交渉し、プロデューサーと主演者という立場で、1983年に明石で1985年に神戸で上演を成功させ、その後の関西での「夕鶴」ブームの火付け役となりました。

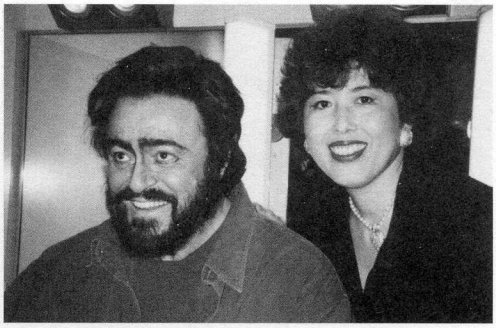
50歳を過ぎてからは、私の体重は私の断わりなしに勝手に増え続けておりますので、何とか、これ以上目方が増えないうちに、相手役の「与ひょう」さんに愛しく抱きかかえてもらえそうなうちにこのオペラの再演を実現できたらと思います。

オペラでは、他にモーツアルトの「フィガロの結婚」の伯爵夫人、「魔笛」の夜の女王等、オペレッタでは「メリー・ウィドー」のハンナ等を得意役としております。これらのアリアは単独でもコンサートで再三歌っております。

歌曲ではシューベルトなどをはじめとするドイツ歌曲やあらゆる時代の日本の歌曲を定期的に演奏しております。

現在、日本シューベルト協会同人、日本リヒャルト・シュトラウス協会会員として研讃を積んでいるところでございます。

今年秋、11月4日（土）午後6時には大阪のイシハラ・ホールに於いて、リヒャルト・シュトラウスの優雅で、華麗な歌曲を集めたリサイタルを開催いたします。皆様の御来聴を心よりお待ち申し上げます。御案内はいずれ改めてさせていただきたいと存じます。



その他に私はこの5〜6年間は、皆様よ〜くご存知の超有名な三大テノールの一人、ルチアーノ・パヴァロッティさんの日本でのファンクラブーCIRCOLO PAVAROTTI a TOKYOーの副会長で、関西代表としても活躍しています。

定期的に日本や世界各地でお目にかかったり、手紙のやりとりなどでの交流や機関誌の発行、会員の親睦会や鑑賞ツアーのアレンジ等を行っておりますが、一番の共通目的は、彼の歌と人柄を尊敬し、彼の歌で私共が幸福になり、私たちも彼の人生の幸福を願うということです。

私は常々パヴァロッティ氏に申し上げております。ー「ルチャーノ！私は貴方を歌手としてだけではなくて、歌わない貴方をも受け入れているわ。貴方が歌手をやめても、私は貴方の作るトマトを食べにイタリアまで飛んで行くからネッ！（彼はリタイアしたら百姓をしたいと常々言っている）」

5月20日の京都でのエリア・ミーティングのパーティでは、パヴァちゃん！貴方をギャグにしてしまってごめんなさい。でも皆さんとても喜んで下さってお陰で和やかな会になりました。感謝しています！

私はゾンタクラブのモットーやボランティア活動の意義については、これから皆様から学ばせていただきたいと思っておりますが、私はいつも身近な人たちの幸福を喜び、人付き合いを楽しみ、私の居場所がたくさんの方々の憩の場となるよう、少しずつ拡大していければ…と願っております。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

編　集　後　記

社会を震撼させる事件が続発している昨今、人々の良心が麻痺してしまわないかと不安が過ります。

広報誌第13号発行に漕ぎつけました。一服の清涼剤たらんことを祈ります。

大阪Ⅱゾンタクラブ　2000年7月1日　広報委員長　辻　康子